

社会的迷惑に関する研究(1)

吉田俊和 安藤直樹¹⁾ 元吉忠寛¹⁾
藤田達雄²⁾ 廣岡秀一³⁾ 斎藤和志⁴⁾
森 久美子⁵⁾ 石田靖彦⁶⁾ 北折充隆¹⁾

問 題

我々の社会を、安全かつ平和に維持している根幹にあるものは法律である。しかし、我々の日常的な社会行動を円滑に進めているのは、法律とは別の社会規範である。いわゆるマナー、エチケット、公衆道徳と呼ばれるような行動の「範」を示すものである。最近、こうした社会規範が大きく揺らいでおり、他者の行動から不快感を生起させられたり、ストレスを感じさせられる機会が増加している。

毎日の通勤や通学を想像して欲しい。車で通えば、無理な車線変更を繰り返す人、車道を並んで走る自転車、コンビニの駐車場が空いていても、道路に駐車して買い物をする人などが、すぐに目に付くはずである。電車で通えば、降りる人がいるのに強引に乗り込もうとする人、車内でも携帯電話のスイッチを切らない人、駅構内の通路のまん中で話し込み、人の流れを混乱させる人など、枚挙にいとまがないであろう。

このように、行為者が自己の欲求充足を第一に考えて、他者に不快な感情を生起させるような社会的迷惑行為が増加する背景には、どのような理由があるのだろうか。第一に挙げられるのは、共同体社会の崩壊と生活空間の拡大により、相互監視システムが機能しなくなったことであろう。つまり、顔見知りを中心の社会では、社会規範からの逸脱行動は必然的に抑制されていたのである。第二に、情報化社会への移行により、価値観の多様化が進み、個人の価値判断が優先される社会になったことである。ところが、その価値判断のルールを決める社会的

コンセンサスは形成されていない。前者は、共通の社会規範は存在するが、それが簡単に守られるような社会ではなくなっているという立場であり、後者は、新しい共通の社会規範は存在しないという立場になる。現状では、両者が混在していると考えた方が、自然であろう。

社会的迷惑という概念を掲げて行われた研究は、これまで筆者らの知る限りでは存在しない。では、我々が考えている問題と関連した概念の研究はないのかと言えば、いくつか散見される。個人の利益と全体の利益との葛藤・調和の問題である社会的ジレンマは、電車の乗り降りのような場合は、双方が協力することによって全体の利益が図られるという点で同じである。しかしながら、車道を並んで走る自転車は、車の運転者に対しては迷惑かもしれないが、車を運転する可能性のない(逆の立場にならない)自転車の人にとっては、車の運転者とは相互依存の関係などもっておらず、事故の確率を考えなければ、利益の独り占めが可能である。すなわち、社会的ジレンマと呼ばれる状況は、「全員が協力すれば結局はみなが得をするのにそうできない」という点に根本問題があり(斎藤, 1999), 社会的迷惑を社会的ジレンマと区別する理由は、「社会的ジレンマの場合には、その解決が全ての人にとって望ましいものであるのに対して、社会的迷惑の場合にはその解決が特定の人々にとっては望ましくない(山岸, 1990)」という指摘が、これまでもなされている。さらに、同じ道路を走っていても、車の運転者と相互依存の関係にない自転車の人たちは、自分たちの行動が運転者に不快感を生起させたり、迷惑をかけているなどという意識は全くないと考えられる。

次に、大坊(1994)は、地下鉄内における非社会的行動、反マナー行動(両者とも迷惑行為に近い)の経験率や不快感を評定させ、そうした行動源の性別や年齢の推測をさせている。その結果、社会的行動の効率低下や配慮不足による非社会的行動の多さを指摘し、社会的関係の充実を図るための社会的スキルの重要性を提言している。相川(1997)は、子どもたちがこうした対人関係に

- 1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(後期課程)
- 2) 名古屋短期大学
- 3) 三重大学教育学部
- 4) 愛知淑徳大学文学部
- 5) 愛知淑徳短期大学
- 6) 愛知教育大学教育学部

関する社会的スキルを獲得しづらくなった原因を4つ（家庭での教育力の低下、地域社会での教育力の低下、学校教育での知育偏重、産業界での学歴偏重）挙げている。そして、対人関係の基本を教える「社会的スキル集団教育」の有効性を力説している。確かに社会的スキルを教育すれば、表面的な対人関係は改善されるであろう。ただ、筆者らが考える社会的迷惑行為の研究が扱おうとしているのは、社会的コンピテンス（相川，1997）の概念に近いものである。言い換えれば、自分の置かれている環境を解釈するスキルを身につけ、他者に対する配慮行動スキルを発揮するような能力である。

これに対し、他者の迷惑になるような行動をとる人たちは、共感性や道德性の発達に問題があるのだとする、発達心理学的立場も存在する。共感性は、他者の非言語的な情動の手がかりに対する感受性の指標であり、円滑な社会関係を作り出す基礎をなすものといえる（磯崎，1987）。そして、セラピストがクライアントに共感的理解を示すように、日常的には自分と相互作用をしている人たちが感じていることの体験（他人感情の移入）ができることである。そこでの共感性は、あくまで自分と関わり合いを持っている人たちに対するものと考えられる。社会的迷惑行為が扱うテーマは、直接相互作用する他者だけでなく、自分と同じ「社会」に住んでいる人たち（相互作用する可能性のある人たち）に対する関心や志向性である。

Kohlberg（1969）は、認知発達理論に基づく道德性の発達を6段階に分類し、高校生や大学生になると、正しい行為を義務の遂行、権威の尊敬、社会秩序の維持からとらえる段階4に達するとしている。こうした段階は、通常、対人的葛藤事態やモラルジレンマ事態における判断課題から決定される。例えば、「禁煙の指定がないので、隣の席に親子連れが座っている場合でも、喫煙する」という行為を取り上げれば、社会的迷惑と道德性の発達は、同じような現象を扱っている。ところが、自動発券機の前で行き先の値段を探し、財布から小銭を取り出す人がいるとすれば、後続の人たちは迷惑だと感じるであろう。道德性の観点からすれば、当の本人は何のジレンマも感じていない。他者が並んで待っているということは、本人の意識の中には全くなく、無意図的にそうした行動をとっているだけである。すなわち、社会的迷惑行為研究は、行為者の判断に基づく行動だけでなく、無意図的行動も含むものであり、無意図的行動の背景として、行為者の社会や他者に対する志向性の低さが関与すると考えている。それと同時に、認知者が迷惑とを感じるメカニズムやそれに対する対処法にも焦点を当てている。迷惑認知のメカニズムには、行為者に対する不快感情が生

起すると考えられるが、対人的な怒りの発生メカニズムの研究（大淵，1993）は、関連研究として興味深い。

このほか、高校生の乗車マナーと文化的自己観の関連を扱った研究（高田・矢守，1998）、授業規範に対する学生や教師の意識に関する研究（岩淵・小牧，1997；1998）がある。前者の研究では、マナーの悪い乗車行動の背景にある「個の認識・主張」の弱さや同質性の他者に対する「評価懸念」の強さは、日本人の自己観の特徴であり、年齢に関係なく閉鎖的な群れの関係性から派生することが指摘されている。後者の研究では、学生と教師が認知する反規範行為の認知構造は類似しており、規制（誰が注意すべきか）意識も大きく変わるものではないことが明らかにされている。

本研究は、社会的迷惑行為に関する第一報であり、二つの研究を報告する。研究Ⅰでは、社会的迷惑行為に関して人々が持っている認知構造、迷惑度の自己認知と他者認知のズレ、迷惑認知と個人特性の関連などについて検討している。研究Ⅱでは、斎藤（1999）で示された社会考慮尺度や社会認識尺度の再検討を行い、一般的な社会状況における迷惑行為に対し、特定状況（結婚式と葬式）における迷惑行為と、社会考慮、社会認識との関連性を検討している。併せて、世代の異なる成人を調査対象とし、社会考慮、社会認識、迷惑認知と対処法についての比較も行っている。

研究Ⅰ

社会的迷惑行為の認知に関する研究⁷⁾

—— 認知構造の検討および個人特性との関連 ——

問 題

本研究では、「社会的迷惑」に対する人々の認知に関して、探索的に検討することを目的としている。

これまで我々は、「社会的迷惑」を、行為者が自己の欲求充足を第一に考えることによって、結果として他者に不快な感情を生起させること、またその行為を指すものと暫定的に定義してきた（例えば、吉田，1998）。また「社会的迷惑」には、攻撃や犯罪のような反社会的な行為と重複する部分もあると思われるが、少なくとも行為者自身は、その反社会性を明確に意識していないとい

7) 本研究は、日本グループ・ダイナミックス学会第46回大会における、安藤らによる発表（迷惑度の自己認知と他者認知に関する分析）を、安藤直樹が加筆修正したものである。本研究は財団法人東海学会奨励会の助成を受けて行われた。記して感謝いたします。

う点において、いわゆる反社会的行為一般とは区別されるべきであると考ええる。

上で述べたような「社会的迷惑」の定義は、どちらかといえば行為者側から捉えたものであるといえよう。しかし、迷惑とはある行為に対して使われる言葉であり、「社会的迷惑」（あるいは一般に迷惑）についての理解を深めるためには、迷惑であると認識する側の視点から検討することが必要であろう。

また一般に、迷惑とは、他者の何らかの行為によって直接被害を被ることで、不快な感情が生起し、その結果迷惑だと認知されるということが想定されるかもしれない。しかし、ここでいう「社会的迷惑」とは、直接的には何ら被害を被ることがなくても、社会的な視点から見れば迷惑である（また、迷惑であると認知する場合には何らかの不快な感情が伴うであろう）という場合も含めて使っている。実際それぞれの場合を明確に区別して考えることは困難であり、迷惑という言葉が用いられるときには、それら2つの場合が混在している。

そこで本研究では、「社会的迷惑」の認知的側面に焦点をあて、その認知構造について探索的に検討することで、「社会的迷惑」の概念をより明確化することを目指した。そして、今後の研究における可能性について模索した。

具体的には、人々がどのような行為に対して迷惑であると感じるのかを調べ、「社会的迷惑」行為の分類を試み、人々のもつ迷惑認知の構造について検討した。また、迷惑であると感じる程度には、個人のもつ社会観や価値観が影響していることが考えられるので、それらの個人特性と迷惑認知との関連についてもあわせて検討した。

さらに、「社会的迷惑」行為に対して、自分以外の他の人々はどの程度迷惑だと感じると思うか、その推定値を調べ、自己が認知した迷惑度とのズレについても検討した。

方 法

＜調査1＞迷惑認知の測定（1997年10月実施）

調査対象

愛知県内の大学・短大に通学する大学生男女672名。そのうち、チェック用を含めた同一の2項目（タバコや空き缶をポイ捨てすること）に対して、それらの評定値のズレが1以内で、調査時の年齢が25歳以下の590名（男性271名、女性319名）を分析の対象とした。

調査内容

「迷惑行為」を表す120項目に対して、「人々の次のようなふるまいを目にしたとき、あなたはどの程度『迷惑だ』と感じるでしょうか」との教示のもとに、「1. 感

じない」から「5. 非常に感じる」の5段階で評定させた。120項目の選定は以下のとおりである。まず本研究の共同研究者8名が、「迷惑行為」を示すと考えられるステイトメントをそれぞれ作成し、それらを集め合計311のステイトメントを収集した。その後、内容の類似したものをまとめ、8名全員で協議して、最終的に120項目とした。

またフェイスシートでは、大学、学部、性別、年齢、居住形態、公共交通機関などの利用頻度、携帯電話・ポケットベルの所有の有無、喫煙や飲酒の有無などをたずねている。

＜調査2＞個人特性の測定（1997年11月実施）

調査対象

調査1の回答者と重複する435名。個人特性を含めた分析においては、そのうちの調査1と2の両方に回答し、有効であるとされた305名（男性142名、女性163名）を対象とした。

調査内容

被調査者の個人特性について調べるために、以下の6つの尺度を用いた。翻訳された、あるいはもとの尺度に変更が加えられた尺度については本稿の付録を、それ以外の尺度についてはそれぞれの文献を参照されたい。

1. Locus of Control (18項目)：鎌原・樋口・清水（1982）による。「1. そう思わない」から「4. そう思う」の4段階評定。
2. 社会意識 (20項目)：和田・久世（1990）より、「身近な事象への関心・社会的事象への無関心」11項目、「規範意識」9項目。「1. 非常に反対」から「5. 非常に賛成」の5段階評定。
3. 集団主義 (10項目)：山口・岡・丸岡・渡辺・渡辺（1988）による。「1. 非常によくあてはまる」から「5. まったくあてはまらない」の5段階評定。
4. 公正世界信念 (6項目)：Dalbert & Katona-Sallay（1996）による尺度を翻訳して用いた。「1. 非常に反対」から「6. 非常に賛成」の6段階評定。
5. 権威主義 (15項目)：藤沢・浜田（1961）による。一部を抜粋し、表現を修正して用いた。「1. 非常に反対」から「6. 非常に賛成」の6段階評定。
6. 価値観 (24項目)：辻岡・村山（1975）より、「博愛的人生観」、「道徳的人生観」各12項目。「1. 反対」から「5. 賛成」の5段階評定。

＜調査3＞他者迷惑認知の測定（1998年1月実施）

調査対象

調査1とは異なる、愛知県および三重県下の大学・短大に通学する大学生男女417名。調査1と同様に、チェッ

ク用を含めた同一の２項目に対する評定値のズレが１以内で、調査時の年齢が２５歳以下であった３８５名（男性１２６名、女性２５６名）を分析の対象とした。

調査内容

調査１と同じ１２０項目について、「次のようなふるまいは、他の人々にどの程度迷惑をかける行為だと思いますか。あなた自身が感じるかどうかではなく、他の人々が感じる迷惑の程度を推測してください」との教示のもと、「１．迷惑にならない」から「５．非常に迷惑になる」の５段階で評定させた。またフェイスシートの質問項目は、調査１と同様である。

結果と考察

＜認知された迷惑度の分析＞

迷惑行為認知について

調査１の被験者（５９０名）が回答した社会的迷惑行為に関する１２０項目について、主成分分析（バリマックス回転）を行った。その結果、２つの主成分を抽出し、各

主成分に負荷.４０以上を示した項目からそれぞれの主成分の内容を解釈した（Table 1－１）。第１主成分には、「タバコや空き缶をポイ捨てすること」や「授業中、授業とは関係のないことを友だちとしゃべること」、「ガスを抜かずにスプレー缶を捨てること」、「駅付近で、指定された区域外に自転車やバイクを置くこと」など、決められたルールや公共のマナーに反する行為が高い負荷を示している。よって、第１主成分は“ルール・マナー違反”行為とした。一方、第２主成分には、「電車などで、わずかに空いたスペースにむりやり座ろうとすること」や「車で、の来客が多い店舗なのに、駐車場を持たずに営業すること」、「あらかじめしていた約束を、直前にキャンセルすること」、「混雑しているのに、券売機の前まで行ってから、目的地までの料金をさがすこと」などの項目が高い負荷を示している。それらは周りにいる人への配慮を欠いた行為であると考えられるので、第２主成分は“周りの人との調和を乱す”行為であると解釈した。

Table 1－１ 迷惑認知尺度の主成分分析（バリマックス回転）結果

項 目	I	Ⅱ	平 均	標準偏差
＜ルール・マナー違反行為＞				
タバコや空き缶をポイ捨てすること	.66	-.09	3.68	1.22
授業中、授業とは関係のないことを友だちとしゃべること	.61	.05	2.19	1.11
ガスを抜かずにスプレー缶を捨てること	.60	.04	2.79	1.28
駅付近で、指定された区域外に自転車やバイクを置くこと	.59	.10	2.37	1.11
人混みで、歩きながらタバコを吸うこと	.56	.03	3.28	1.50
授業や講演会が始まる前に、ポケットベルのスイッチを切らないこと	.55	.04	3.01	1.37
指定された日以外にゴミを出すこと	.54	.14	3.09	1.35
電車やバスにただ乗りすること	.53	.07	2.72	1.43
路上に噛んだガムを捨てること	.53	.03	4.04	1.14
授業や講演会が始まっても、音を立てて入ってくる	.52	.18	3.09	1.19
住宅街の狭い道でスピードを出して運転すること	.52	.16	3.61	1.12
車のエンジンをかけたまま駐車すること	.51	.09	2.08	1.18
図書館で声の大きさを気にしないでしゃべること	.51	.21	3.62	1.10
場をわきまえず性的な話をする	.49	.22	2.77	1.26
煙の出ている吸殻を灰皿に放置すること	.49	.03	3.31	1.34
授業中にジュースを飲むこと	.49	.09	1.90	1.10
レストランなどで食事中にタバコを吸うこと	.48	.04	3.29	1.50
何時だろうが時間を気にせず電話すること	.47	.19	3.11	1.33
公衆トイレに不愉快な落書きをすること	.47	.23	2.71	1.33
散歩させている犬のフンの始末をしないこと	.47	.11	3.55	1.28
深夜に暴走すること	.46	.14	3.92	1.27
混雑した車内で、長い髪の毛をかき上げたり振ったりすること	.45	.26	3.26	1.27
公園の芝生でゴルフの練習をすること	.45	.05	2.35	1.29
電車などで、乗降口付近に荷物を置くこと	.45	.37	2.83	1.16

火事や事故の現場を見に行くこと	.45	.15	2.12	1.17
濡れた傘の水を切らずに、そのまま建物の中へ持ち込むこと	.45	.24	2.62	1.10
飲めない人にお酒をすすめること	.45	.03	3.09	1.37
研究室の前を大声で話しながら通ること	.43	.16	2.94	1.16
一度手にした商品を元の場所にきちんと戻さないこと	.43	.18	2.78	1.09
車内で、グループの人同士が大きな声でおしゃべりをする	.43	.31	2.80	1.19
電車の中やレストランなどで、携帯電話をかけること	.42	.08	2.85	1.27
夜、無灯火のままで自転車に乗ること	.42	.17	2.87	1.33
人通りの激しい場所で、グループが横になって歩くこと	.42	.38	3.52	1.09
バイキング形式の食事で、食べきれないほどの料理をとってきて残すこと	.42	.18	2.62	1.24
授業参観に来て、親同士が授業とは関係なくおしゃべりしていること	.41	.28	2.73	1.38
自転車同士で横にならんで走ること	.41	.32	2.94	1.23
道路に落ちた庭木の葉をかたづけられないこと	.40	.23	1.92	0.98
いいかげんな計画しか立てずに、登山をすること	.40	.14	2.65	1.42
人通りの激しい場所で、グループで立ち止まって、おしゃべりすること	.38	.22	3.63	1.17
電車内で、ヘッドフォンステレオの音漏れを気にせずに音楽を聴くこと	.38	.31	2.79	1.24
病院・映画館・レストランなどで、大きな声で話したり笑ったりすること	.38	.25	3.56	1.14
夜中に、近所に聞こえるほどの大きな音で音楽を聴くこと	.38	.31	3.49	1.21
コンピューターソフトを不正にコピーして使用すること	.37	.18	2.25	1.27
看板・商品台・販売機などを路上にはみ出して設置すること	.37	.23	2.50	1.22
電車などで、混んできているのに席をつめないこと	.37	.33	3.47	1.18
人がいっぱいいるプールで、飛び込みをすること	.37	.35	3.18	1.19
水不足のときに洗車すること	.37	.08	3.08	1.30
雨の日に歩行者に水しぶきがかかるような運転をすること	.36	.29	4.06	1.01
間違い電話をかけてもあやまらずに切ってしまうこと	.35	.34	3.81	1.22
混雑している食堂で、荷物だけを先に置いて席取りをすること	.35	.17	2.64	1.34
レストランなどで、食事をしている人の横でコートを脱いだり着たりすること	.35	.31	2.07	1.08
みんなでやらなければならない活動に、自発的に参加しようとししないこと	.35	.25	3.02	1.14
公衆浴場で浴槽に自分のタオルをつけること	.35	.24	2.33	1.17
イベントが終わってもポスターをはがさないこと	.34	.22	1.90	1.12
他人の自転車を倒しても、そのままにしておくこと	.34	.14	3.47	1.15
露出度の高い服装で人前に出ること	.32	.28	1.83	1.06
事前に連絡しないで人の家を訪問すること	.30	.23	2.62	1.30
渋滞しているのに、車線変更を繰り返すこと	.29	.29	3.45	1.22
ならんで電車やバスを待っている人たちの横から割り込もうとすること	.28	.22	4.45	0.88
公衆の面前で抱き合ったり、キスしたりすること	.27	.24	2.27	1.22
友だちに「お金を貸して」と頼むこと	.27	.26	2.39	1.24
買う気がないのに、本屋で立ち読みをすること	.25	.20	1.43	0.81
人のプライバシーに関わることを話題にすること	.23	.11	3.56	1.13
セスナ機を使って空から大音量で宣伝すること	.20	.18	2.86	1.36
<周りの人との調和を乱す行為>				
電車などで、わずかに空いたスペースにむりやり座ろうとすること	-.06	.54	3.35	1.21
車で多くの来客の多い店舗なのに、駐車場を持たずに営業すること	.12	.50	3.15	1.32
あらかじめしていた約束を、直前にキャンセルすること	.10	.49	3.59	1.24
混雑しているのに、券売機の前まで行ってから、目的地までの料金をさがすこと	.17	.49	3.09	1.24
人混みの中で、親が泣いている子どもを叱りつけ、さらに泣かせてしまうこと	.00	.49	3.20	1.35
交通量の多い交差点で、親がよちよち歩きの子どもの歩かせること	.11	.47	2.71	1.30

社会的迷惑に関する研究（１）

電車などで、降りる人がたくさんいるのに、乗降口付近で自分の場所を動かないこと	.30	.47	3.66	1.16
公衆電話で後ろに人が待っていても、気にせずそのまま長話すること	.25	.46	4.02	1.06
混雑した電車などで、他人の足を踏んでも知らない振りをする	.16	.46	3.33	1.14
狭い通路ですれ違うときに、道をゆずる素振りを見せないこと	.24	.46	3.42	1.22
自慢話を長々とすること	.01	.44	3.45	1.22
信用して話してもらったことを、他の人にしゃべること	.20	.43	4.37	.97
人から借りた物を、催促されるまで返さないこと	.24	.42	3.80	1.19
集団で結論を出す必要があるのに、個人の意見を主張し続けること	.06	.42	3.04	1.17
写真を撮っている前を横切ること	.18	.42	3.20	1.23
混雑した駅のホームで、おおきなバックを持って走ること	.20	.41	2.09	1.08
ひんぱんに愚痴をこぼすこと	.09	.41	2.87	1.23
相手の趣味を考えずにプレゼントすること	.12	.41	1.89	.98
雰囲気をごわしてでも、すすめられたお酒を断ること	-.16	.41	2.04	1.16
約束の時間を守らないこと	.24	.41	3.65	1.19
お店で、呼びもしないのに店員が寄ってきてあれこれすすめること	.08	.40	3.75	1.24
後ろの人を気にしないで、重い反動ドアから手を放すこと	.20	.39	2.79	1.17
駐車場の仕切線を無視して駐車すること	.32	.39	3.64	1.16
混雑した電車などで、空席の前に立ったままでいること	.10	.39	2.47	1.32
みんなで話合っているとき、一部の人が内輪話で盛り上がる	.22	.38	3.24	1.14
車の流れを気にせずに、制限速度を守ること	-.19	.38	3.03	1.29
病院・映画館・レストランなどで、同伴した子どもが騒いでいるときにやめさせようとしないこと	.11	.38	4.28	0.96
販売・勧誘などの目的で、繰り返し他人の家を訪問すること	.16	.37	4.39	0.94
通行のさまたげになる駐車をすること	.34	.37	3.89	1.03
電車などで、席をゆずられたお年寄りがそれを断ること	.01	.37	2.38	1.39
食堂で、待っている人がいるのに、食べ終わっても席を立たないこと	.23	.37	3.40	1.20
人混みで、人の流れに逆らって歩くこと	.34	.36	2.16	1.02
個人の失敗や欠点を面白がってみんなに話すこと	.23	.36	3.74	1.21
混み合っている所で記念写真を撮ること	.32	.35	2.22	1.06
カラオケボックスで、一緒に来た人達が帰りがっているのにいつまでも歌い続けること	.31	.35	3.15	1.14
人前で口を覆わずにくしゃみをする	.27	.35	3.12	1.25
食後にお茶でうがいして飲むこと	.13	.35	3.17	1.48
場所や時間をわきまえずに選挙運動をすること	.20	.34	3.62	1.27
リュックを背負ったまま満員電車に乗ること	.28	.33	2.18	1.23
歩道上を自転車でスピードを出して走ること	.27	.33	2.48	1.18
強い香りの香水や整髪剤をたくさんつけて、電車やバスに乗ること	.29	.33	3.46	1.25
病人が座れないほど混雑した病院の待合室で、付き添いの人がイスに座ること	.25	.33	2.93	1.29
手紙の返事を書かないこと	.16	.33	2.44	1.18
犬や猫を放し飼いにすること	.28	.32	2.72	1.34
光量の多い（まぶしい）ヘッドライトを点灯させて走ること	.15	.32	3.75	1.21
店先や路上で、グループでたむろしながら通行人をじろろみること	.28	.32	3.65	1.23
電車などで、降りようとする人がいるのに、乗り込んでくること	.24	.30	4.10	1.00
「お一人様いくつ」の制限がある品物を、何回もならんで買い求めること	.28	.29	2.39	1.37
トイレに入っても手を洗わないこと	.24	.29	2.91	1.35
人の意見に反論するだけで、自分の意見をはっきり言わないこと	.21	.28	3.28	1.19
酒を飲んで他人にからむこと	.27	.28	3.57	1.27
留守番電話だと何も言わずに切ってしまうこと	.03	.28	1.83	1.14
公園や路上で、演奏などのパフォーマンスをすること	.19	.27	1.42	0.78

街頭で宗教の勧誘活動をすること	.07	.25	3.40	1.34
世代の違う人に対して自らの価値観を押しつけること	-.00	.22	3.55	1.15
不特定多数の人に対し、チラシやティッシュを配ること	.19	.21	1.75	1.00
2乗和	20.89	4.33		
寄与率	17.4	3.6		

個人特性尺度について

個人特性を測定する6つの尺度それぞれについて、その構造を検討した結果、Locus of control, 社会意識、集団主義、公正世界信念の各尺度については従来と同様の構造と見なすことができると判断した。しかし権威主義については、他の項目との関連が弱い項目が見られたため、今回の分析ではそれらの項目を除外した。また価値観尺度については、従来の「博愛的人生観」と「道徳的人生観」の他に、「自己利益優先的人生観」を示していると考えられる項目群が認められ、最終的に3つの下位構造に分類できると判断し（どの下位構造にも属さなかった5項目は除外された）、以後の分析ではこれら3つの下位尺度について検討した。各尺度得点の平均と標準偏差はTable 1-2のとおりである。

Table 1-2 各個人特性の尺度得点の可能得点範囲、平均および標準偏差

	可能得点範囲	平均	標準偏差
Locus of Control	18~72	48.85	6.90
身近な事象への関心・ 社会的事象への無関心	11~55	31.17	4.90
規範意識	9~45	30.13	3.61
集団主義	10~50	30.55	4.41
公正世界信念	6~36	20.22	3.92
権威主義	12~72	41.03	6.50
自己利益優先的人生観	10~50	25.90	5.55
博愛的人生観	5~25	19.61	2.62
道徳的人生観	4~20	12.01	2.71

迷惑行為認知と個人特性の関連

先の分析で示された2種類の迷惑行為（「ルール・マナー違反行為」と「周りの人との調和を乱す行為」）について、各主成分に.40以上の負荷を示した項目の評定値（迷惑度）をそれぞれ合計し、各行為の迷惑度得点とした。迷惑行為認知と個人特性との関連を調べるため、調査2の被験者305名の迷惑度得点と個人特性尺度得点との相関係数を算出した。その結果、「ルール・マナー違反行為」に対する迷惑度と、「身近な事象への関心・社会的事象への無関心」（社会意識尺度）との間に負の

相関が（ $r = -.20, p < .001$ ）、また「規範意識」（社会意識尺度）、「博愛的人生観」、「道徳的人生観」（共に価値観尺度）との間にはそれぞれ正の相関が認められた（ $r = .27, p < .001$; $r = .23, p < .001$; $r = .24, p < .001$ ）。「周りの人との調和を乱す行為」に対する迷惑度については、権威主義との間に正の相関が認められた（ $r = .26, p < .001$ ）。

今回の結果では、人々が「迷惑だ」と感じる行為は大きく2種類に分別された。1つは、社会的に広く認められ、一般常識とさえいえるようなルールやマナーに反する行為であり、「ルール・マナー違反行為」とされた。また、これらの行為を迷惑と感じる程度については、社会意識や価値観との関連が認められた。社会的な事象に関心をもち、規範意識が強い人ほど、また博愛的な人生観や道徳的な人生観をもつ人ほど、そうした行為を迷惑だと感じるといえよう。

もう1つは、ルールやマナーのような比較的はっきりとした社会的な基準があるとはいえないが、周りにいる人への配慮を欠く行為であり、「周りの人との調和を乱す行為」とされた。これらの行為を迷惑と感じる程度については、権威主義との関連が見られた。権威主義的な人のような柔軟性、寛容性に欠ける人にとって、こうした行為はより迷惑なものと映るのかもしれない。

冒頭でも述べたように、迷惑であると感じるのは、あるいは迷惑という言葉が用いられるのは、他者から直接被害を被る場合だけでなく、直接的には何ら被害を被らなくても、社会的な視点からみれば迷惑であるという場合も含まれるだろう。したがって、調査1で測定された迷惑度は、それら2つの場合が混在したものであるといえる。2つの場合は明確に区別されるものではないが、今回分別された2種類の迷惑行為について見てみると、「ルール・マナー違反行為」は、その命名の理由からも、またそれらの行為に対する迷惑度と規範意識や社会的事象への関心との関連が認められたことから、社会的な視点から迷惑であると判断される度合いがより強い行為であると考えられる。

<迷惑度の自己認知と他者認知に関する分析>

迷惑度の自己認知と他者認知のズレ

先の迷惑行為認知（以下、迷惑度の自己認知と呼ぶ）に関する調査対象と、他者迷惑推定（以下、迷惑度の他者認知と呼ぶ）に関して、各非調査者の１項目あたりの平均評定値は、自己認知（ $M=3.01$, $SD=.49$ ）よりも他者認知（ $M=3.28$, $SD=.45$ ）の方が高かった（ $t(974)=9.02$, $p<.001$ ）。つまり、自己が実際に感じる迷惑度よりも、他者が感じるであろう迷惑度の方が高く評定されている傾向がある。

また、それぞれの迷惑度の平均値に基づいて、上位・下位各10項目ずつを自己認知と他者認知の間で比較したところ、それぞれ9項目について重複がみられた（Table 1－3）。また、自己認知と他者認知の間の順位相関は $\rho=.91$ （ $p<.001$ ）であった。自分にとって極端に迷惑である（迷惑でない）行為は、他者にとっても迷惑である（迷惑でない）と推定する傾向が示唆される。

自他のズレが大きい項目に対する自己認知の構造

自己認知評定について、平均値が他者認知評定よりも.40以上低かった35項目を選択し、主成分分析（バリマックス回転）を行ったところ、3つの主成分が抽出された。各成分に.40以上の負荷を示した項目をTable 1－4に示す。第1主成分は、被調査者本人が直接迷惑を被ると

いうよりは、社会規範からの逸脱が問題であると考えられるので、「逸脱的迷惑行為」とした。第2主成分は、迷惑を被るだけでなく、自らも迷惑をかける可能性が高い行為と考えられるので「対称的迷惑行為」とした。第3主成分は、本研究の被調査者が日常生活において直接経験することの少ない行為と考えられるので「非日常的迷惑行為」とした。

すなわち、他者が感じるであろう迷惑度よりも、実際に自分が感じる迷惑度の低い行為とは、(a)社会的に禁止されているが自分は被害を受けない、(b)自分も迷惑をかける可能性がある、(c)経験したことが少ない、といった特徴を備えているといえる。

自他のズレが小さい項目に対する自己認知の構造

自己認知評定について、他者認知評定の平均値との差が±.10以内の22項目を選択し、主成分分析（バリマックス回転）を行ったところ、3つの主成分が抽出された。各主成分に.40以上の負荷を示した項目をTable 1－5に示す。第1主成分は、日常しばしば遭遇し、迷惑を感じることの多い行為と考えられるので「日常的迷惑行為」とした。第2主成分は、社会的な禁止の対象にならない行為と考えられるので「非逸脱的迷惑行為」とした。第

Table 1－3 迷惑認知度の高い行為・低い行為

	自己認知 平均 (SD)	他者認知 平均 (SD)
<迷惑認知度の高い行為>		
ならんで電車やバスを待っている人たちの横から割り込もうとすること	4.45(0.88)	4.51(0.73)
販売・勧誘などの目的で、繰り返し他人の家を訪問すること	4.39(0.94)	4.57(0.73)
信用して話してもらったことを、他の人にしゃべること	4.36(0.98)	4.53(0.76)
病院・映画館・レストランなどで、同伴した子どもが騒いでいるのにやめさせようとしないこと	4.28(0.96)	4.35(0.80)
雨の日に歩行者に水しぶきがかかるような運転をすること	4.06(1.01)	4.27(0.84)
路上へ噛んだガムを捨てること	4.04(1.13)	4.17(1.00)
公衆電話で後ろに人が待っていても、気にせずそのまま長話をする	4.03(1.05)	4.22(0.85)
深夜に暴走すること	3.92(1.26)	4.35(0.93)
通行のさまたげになる駐車をすること	3.89(1.03)	4.15(0.84)
<迷惑認知度の低い行為>		
公園や路上で、演奏などのパフォーマンスをすること	1.42(0.78)	1.51(0.75)
買う気がないのに、本屋で立ち読みをすること	1.43(0.81)	1.84(0.94)
不特定多数の人に対し、チラシやティッシュを配ること	1.75(1.00)	1.86(0.93)
露出度の高い服装で人前に出ること	1.83(1.06)	1.91(1.05)
留守番電話だと何も言わずに切ってしまうこと	1.83(1.14)	1.84(1.02)
授業中にジュースを飲むこと	1.89(1.09)	2.00(1.02)
相手の趣味を考えずにプレゼントをすること	1.89(0.98)	2.09(1.02)
イベントが終わってもポスターをはがさないこと	1.90(1.12)	2.12(1.04)
雰囲気をおこしてでも、すすめられたお酒を断ること	2.04(1.16)	2.03(1.02)

Table 1-4 ズレの大きい項目に対する主成分分析（バリマックス回転）の結果

項 目	主 成 分		
	I	II	III
<逸脱的迷惑>			
電車やバスにただ乗りすること	.58	.18	.11
住宅街の狭い道でスピードを出して運転すること	.56	.20	.06
タバコや空き缶をポイ捨てること	.56	.23	.07
飲めない人にお酒をすすめること	.55	-.03	.10
深夜に暴走すること	.55	.25	-.08
いいかげんな計画しか立てずに、登山すること	.53	.08	.10
ガスを抜かずにスプレー缶を捨てること	.53	.18	.29
場をわきまえずに性的な話をする事	.48	.23	.18
車のエンジンをかけたまま駐車すること	.44	.06	.39
授業中、授業とは関係のないことを友だちとしゃべること	.44	.28	.22
駅付近で、指定された区域外に自転車やバイクを置くこと	.44	.19	.38
指定された日以外にゴミを出すこと	.43	.26	.29
夜、無灯火のままで自転車に乗ること	.43	.11	.24
<対称的迷惑>			
研究室の前を大声で話しながら通ること	.09	.66	.11
授業や講演会が始まっても、音を立てて入ってくること	.31	.62	.01
濡れた傘の水を切らずに、そのまま建物の中へ持ち込むこと	.23	.56	.16
夜中に、近所に聞こえるほど大きな音で音楽を聴くこと	.27	.53	.01
図書館で声の大きさを気にしないでしゃべること	.42	.52	-.01
人がいっぱいいるプールで、飛び込みをすること	.17	.49	.26
<非日常的迷惑>			
犬や猫を放し飼いにすること	.21	-.03	.54
交通量の多い交差点で、親がよちよち歩きの子どもの歩かせること	.00	.04	.53
公衆浴場で浴槽に自分のタオルをつけること	.09	.24	.51
リュックを背負ったまま満員電車に乗ること	-.04	.38	.49
病人が座れないほど混雑した病院の待合室で、付き添いの人がイスに座ること	.03	.25	.46
電車などで、乗降口付近に荷物を置くこと	.29	.28	.46
火事や事故の現場を見に行くこと	.38	.07	.41

3主成分は、迷惑を被る頻度に比べて、自ら迷惑をかけることが少ない行為であると考えられるので「非対称的迷惑行為」とした。

また1項目あたりの平均評定値には成分による差異がみられ ($F(2,1178)=1114.75, p<.001$), 非対称的迷惑行為 ($M=3.59, SD=.78$), 日常的迷惑行為 ($M=3.52, SD=.61$), 非逸脱的迷惑行為 ($M=2.15, SD=.63$) の順に迷惑度が高かった。非対称的迷惑行為は自他ともに迷惑度が高いと考えているのに対し、非逸脱的迷惑行為は自他ともに迷惑度が低いと推察しているといえる。

迷惑度の自己認知と個人特性の関連

自己認知と他者認知のズレに関する先の2つの分析で

得られた計6つの主成分ごとに、.40以上の負荷を示した項目の評定値をそれぞれ合計し、迷惑度得点とした。これら迷惑度得点と各個人特性尺度得点との相関をTable 1-6に示す。社会事象への関心が薄く、自己利益追求の人生観を持つ者は、逸脱的・対称的迷惑行為についてあまり迷惑だと感じていないことがわかる。また、規範意識の強い人ほど逸脱的迷惑を、権威主義的傾向の強い人ほど非逸脱的迷惑を、それぞれ認知しやすいといえる。また、博愛的人生観を持つ者は、全体的に迷惑だと感じやすい。これらの結果は、「他者が迷惑だと感じるだろう」という感受性が、社会規範や他者への配慮を意識する度合いと関連することを示唆しているといえよう。

社会的迷惑に関する研究（1）

Table 1-5 ズレの小さい項目に対する主成分分析（バリマックス回転）の結果

項 目	主 成 分		
	I	II	III
<日常的迷惑>			
ならんで電車やバスを待っている人たちの横から割り込もうとすること	.61	-.23	.21
一度手にした商品を元の場所にきちんと戻さないこと	.56	.21	-.10
電車などで、降りようとする人がいるのに、乗り込んでくること	.54	-.00	.10
間違い電話をかけてもあやまらずに切ってしまうこと	.51	.15	.23
煙の出ている吸殻を灰皿に放置すること	.48	.07	-.05
電車の中やレストランなどで、携帯電話をかけること	.47	.15	-.13
みんなでやらなければならない活動に、自発的に参加しようとししないこと	.44	.30	-.01
光量の多い（まぶしい）ヘッドライトを点灯させて走ること	.41	-.03	.41
強い香りの香水や整髪料をたくさんつけて、電車やバスに乗ること	.42	.20	.16
<非逸脱的迷惑>			
公園や路上で、演奏などのパフォーマンスをすること	.01	.61	-.10
露出度の高い服装で人前に出ること	.24	.59	-.15
留守番電話だと何も言わずに切ってしまうこと	-.09	.52	.10
ひんぱんに愚痴をこぼすこと	.01	.46	.34
後ろの人を気にしないで、重い反動ドアから手を放すこと	.11	.42	.28
<非対称的迷惑>			
車の流れを気にせず、制限速度を守ること	-.11	.02	.66
自慢話を長々とすること	.03	.18	.55
病院・映画館・レストランなどで、同伴した子どもが騒いでいるときにやめさせようとししないこと	.40	-.13	.53

Table 1-6 迷惑の自己認知度と個人特性の相関

	ズ レ 大			ズ レ 小		
	逸 脱	対 象	非日常	非逸脱	非対称	日 常
身近な事象への関心・社会的事象への無関心	-.25***	-.13	-.04	-.01	.07	-.10
規範意識	.31***	.19	.08	.13	-.09	.15
自己利益的人生観	-.22***	-.12	.03	.00	.14	-.09
博愛的人生観	.24***	.21***	.12	.19	.04	.23***
道徳的人生観	.25***	.20***	.05	.11	-.03	.06
Locus of Control	.11	.14	.11	.11	.01	.13
権威主義	.07	.16	.06	.28***	.10	.14
正当世界信念	.02	.02	.10	.15	.03	-.01
集団主義	-.04	.04	-.04	.05	-.08	-.02

***: $p < .001$

最後に、本研究のデータのもつ制約について述べておこう。本研究は大学生を対象として行われたものであり、結果として得られた迷惑認知の構造は大学生の日常生活が反映したものだろう。したがって、本研究での考察はあくまで1つの可能性にすぎない。我々が「社会的迷惑」

と呼ぶものに対して、その理解をより深めていくためには、年代や社会的背景の異なるサンプルについてさらに調査する必要があるのは言うまでもない。しかし本研究は、今後の「社会的迷惑」に関する研究において、1つの有用な視点を提供するものとなろう。

研究 II

冠婚葬祭における迷惑行為の研究⁸⁾

—— 社会考慮、社会認識、世代差からの検討 ——

問題

本研究では、以下の2つの点を明らかにするために学生とその母親を対象とした調査を行った。第一に“社会考慮”と“社会認識”という2つの概念について検討することである。第二にこれらの概念と結婚式や葬式といった特定状況における迷惑行為との関連性を検討することである。

社会考慮とは、個人の生活空間を「社会」として意識している程度や、複数の個人から成る社会というものを考えようとする態度である。斎藤（1999）は、迷惑行為と社会考慮について検討を行っている。そして社会考慮の高い人はルール・マナー違反に属する迷惑行為について迷惑だと認知する傾向があることを指摘した。また社会考慮の低い人は、迷惑行為を放任する（問題視しない）傾向があることも指摘している。これらの結果は、迷惑行為という問題について社会考慮という概念が有用であることを示したといえる。しかし、斎藤（1999）では、社会考慮を測定する項目が3項目のみから作成されていたことからさらなる検討が必要である。本研究では社会考慮を測定する項目を追加し、より安定した尺度を作成する。

人は社会を考慮することによって、社会に対してある種の社会認識を持つ。社会認識とは、法律や規則が社会の中で果たす役割、他者との協力・連携、利己的な行動や個人の権利が社会の中で持つ意味をどのように認識しているかというものである。斎藤（1999）は、社会認識に関する項目の因子分析の結果から、“他者への配慮（e.g., ひとりひとりが力を合わせることによって、もっと住みよい世の中になる）”、“他者に対する無力感（e.g., 世の中の大部分の人は、社会のことなど何も考えていない）”、“社会的規制（e.g., 社会を住みよくするためには、法律や規則をもっと厳しくするべきだ）”、“社会に対する無力感（e.g., 環境問題などは、自分ひとりが何かをしても解決するとは思えない）”の4因子を抽出した。そして、他者に配慮することや規制社会を

志向するものが迷惑認知が高いことを明らかにしている。また、社会認識が異なれば迷惑行為の対処方略も異なることも明らかにしている。これらの結果は、社会認識が迷惑行為と関連性が高いことを示している。本研究では、迷惑行為と関連する社会認識について斎藤（1999）の4因子をもとにさらなる検討を行う。

また、研究 I や斎藤（1999）で扱われた迷惑行為は広範囲の一般的なものであった。本研究では、結婚式と葬式という特定状況における迷惑行為について検討する。特定状況における迷惑行為について、社会考慮や社会認識との関連性を明らかにする。

結婚式や葬式などの儀式についての認識は時代とともに変化し、世代によっても異なる。そこで、社会考慮や社会認識と迷惑行為の関連性について、学生だけでなく成人（母親）に対しての検討も行い世代間の比較をする。

方法

調査対象

東海地方の4つの大学の学生・大学院生（男性14名、女性122名、平均年齢21.0歳）とその母親（92名、平均年齢49.2歳）であった。授業等で学生に調査用紙を渡し、親子のデータを合わせて返却してもらい91組の対応あるデータを得た。下宿生からは、本人のデータのみ回収した。

調査項目

1. 迷惑行為に対する許容度と対処方略……結婚式における迷惑行為（e.g., “友だちが、スピーチで冗談交じりに新郎（新婦）の過去の異性経験を口にする”）6状況と、葬式における迷惑行為（e.g., “親族側の席に、派手な化粧をして、金色のアクセサリーをつけた参列者がいる”）6状況の計12状況を設定した。これらの迷惑行為に対する許容度を、「1. 許容されないと思う」から、「4. 許容されると思う」までの4段階で回答を求めた。さらに、その迷惑行為に対する対処方略として、①規制的対処（e.g., “そのような可能性がある友だちは、最初から呼ぶべきではない”）、②共生的対処（e.g., “そういったことは話さないように、事前に友だち同士で確認し合うのがよい”）、③放任的対処（e.g., “本人は言いたいものだから、言わせてやればよい”）、④無関心（e.g., “自分のことが言われなければ、なんとも思わない”）の4つのカテゴリーから選択させた。

2. 社会的考慮尺度……社会の成り立ちを考えたり、自分の行動が社会に与える影響を意識したりする程度の個人差を測定するために、斎藤（1999）の3項目と合わせて、計13項目を作成し、「1. まったくあてはまらない

8) 本研究は、日本心理学会第63回大会における、吉田らによる発表（冠婚葬祭における迷惑行為の研究）を、元吉忠寛が加筆修正したものである。本研究は、（財）東海冠婚葬祭産業振興センターの助成を受けて行われた。記して感謝いたします。

い」から「5. よくあてはまる」までの5段階評定で回答を求めた。

3. 社会認識尺度……迷惑行為と関連する社会認識として、斎藤 (1999) をもとに新たな項目を加えて項目を作成した。規制的社会認識 (e.g., 社会を住みよくするためには、法律や規則をもっと厳しくするべきだ)、共生的社会認識 (e.g., ひとりひとりの人間が、他人に対して配慮すれば社会はよくなる)、小市民的社会認識 (e.g., 他人の権利のことなど考えずに、自分のことだけ考えていけばよい)、権利的社会認識 (e.g., 個人の自由と権利は、いかなる場合でも優先させなければならない) の4つの社会認識に対応する合計34項目であった。規制的社会認識と共生的社会認識は、それぞれ斎藤 (1999) の社会的規制因子と他者配慮因子に対応している。小市民的社会認識と権利的社会認識は本研究において新たに追加したものである。これらについて、「1. まったくあてはまらない」から「5. よくあてはまる」までの5段階評定で回答を求めた。

結 果

尺度の構成

社会考慮の13項目について主成分分析を行った。固有値の減衰状況 (5.42, 1.47, 1.01, 0.92 ……) と解釈のし易さから1因子とした (Table 2 - 1)。13項目を合計し項目数で割ったものを尺度得点とした。社会考慮は高い内的整合性が確認された ($\alpha = .88$)。

社会認識は、それぞれの概念が独立的であると考えられたため、概念ごとに分析を行った。社会認識のうち、規制的社会認識8項目、共生的社会認識8項目について、主成分分析を行った。固有値の減衰状況は、規制的社会認識が、2.97, 1.20, 0.88, ……, 共生的社会認識が、2.69, 1.08, 1.01, 0.89, ……であった。ともに解釈のし易さから1因子とした (Table 2 - 2 と Table 2 - 3)。負荷量が.40以上であった項目について合計し、項目数で割ったものをそれぞれの尺度得点とした。 α 係数は、規制的社会認識が.76, 共生的社会認識が.71であった。

小市民的社会認識9項目および権利的社会認識9項目は、主成分分析、項目尺度間相関、内的整合性の検討を

Table 2 - 1 社会考慮の主成分分析の負荷量と項目ごとの世代別の平均

項 目	I	母 親	学 生
11. 社会の中で、自分はどのように行動すべきなのかを考えることがある。	.77	3.46(0.96)	3.59(0.93)
○2. 自分が暮らす社会全体のことについて考えることがある。	.73	3.51(0.96)	3.28(1.04)†
5. 社会全体がどのような方向に動いているかということに関心がある。	.71	3.75(0.92)	3.63(0.93)
○3. 社会がいかに成り立っているかということについて考えることがある。	.70	3.14(1.00)	2.73(1.09)**
12. 社会の中で、自分がどのような立場におかれているかを考えることがある。	.70	3.23(0.91)	3.46(0.92)†
4. 自分の行動が、同じ社会に暮らす他の人々にいかなる影響を及ぼすかを考えることがある。	.69	3.26(0.97)	2.99(1.11)†
10. 自分の生活と社会の仕組みがどのように関連しているのかを考えることがある。	.68	3.30(0.99)	2.97(0.96)*
7. 社会の変化が、自分の生活にどのような影響を与えるのかを考えることがある。	.66	3.71(0.87)	3.48(0.98)†
○1. 自分の行動がいかに社会に影響を与えているのかを考えることがある。	.63	2.78(0.96)	2.68(0.99)
8. 自分の行動が、同じ社会に暮らす他の人々にどのように受けとめられるかを考えることがある。	.59	3.59(0.88)	3.59(1.06)
9. 自分の暮らす社会で今なにが問題になっているのか気になる。	.55	3.89(0.84)	3.71(0.94)
13. 社会の中で、自分とは異なる立場にいる人々のことについて考えることがある。	.51	3.46(0.93)	3.74(0.90)*
6. 自分の暮らす社会が将来どのようなようになっていくのか気になる。	.38	4.10(0.75)	4.13(0.76)
2 乗 和	5.42		

○印は、斎藤 (1999) で用いられた項目である。

* $p < .10$ † $p < .05$ ** $p < .01$

Table 2 - 2 規制的社会認識尺度の主成分分析の負荷量と項目ごとの世代別の平均

項 目	I	母 親	学 生
1. 社会を住みよくするためには、法律や規則をもっと厳しくするべきだ。	.76	3.11(0.95)	2.52(0.94) ***
3. 社会の秩序を維持するためには、法律や規則が最も重要である。	.70	3.37(0.93)	2.46(1.01) ***
2. 世の中は法律や規則がきちんとしていれうまく治まる。	.65	3.02(0.95)	2.44(0.95) ***
4. 規則や法律を破る人は、社会人としての資格がない。	.62	3.98(0.79)	3.57(0.92) **
5. 世の中のもめ事の多くは、適切な規則が定められていないことが原因だ。	.59	2.98(0.77)	2.63(0.84) **
8. 世の中の平穏を保つためには、違反行為をした人を厳重に取り締まった方がよい。	.58	3.67(0.84)	3.55(0.83)
7. 人々が気持ちよく暮らすためには、自分勝手なことをする人を排除すべきだ。	.54	2.92(0.84)	2.74(0.98)
6. 多くの人が集まるところには、ルールや規則が必要である。	.36	4.34(0.60)	4.29(0.56)
2 乗 和	2.97		

* $p < .01$ ** $p < .01$

Table 2 - 3 共生的社会認識尺度の主成分分析の負荷量と項目ごとの世代別の平均

項 目	I	母 親	学 生
7. ひとりひとりの人間が、他人に対して配慮すれば社会はよくなる。	.76	4.17(0.64)	3.93(0.71)*
5. 世の中の人、社会全体が暮らしやすくなるように協力すべきである。	.72	4.18(0.64)	4.11(0.64)
2. 思いやりのある人間が増えれば、世の中はよくなる。	.68	4.37(0.73)	4.13(0.86)*
1. ひとりひとりが力を合わせることによって、もっと住みよい世の中になる。	.58	4.10(0.75)	4.11(0.74)
3. 他人の幸福を考えることは、自分が幸福になることにつながる。	.56	3.55(0.94)	3.64(0.82)
4. 困っている人に手をさしのべるのは当然のことだ。	.49	4.11(0.72)	4.16(0.64)
6. 犯罪の抑制には、法律や罰則の整備よりも人々の意識を高めることの方が重要だ。	.36	4.00(0.87)	4.02(0.85)
8. お互いが信じあうことによって、世の中は成り立っている。	.35	3.68(0.86)	3.38(0.93)
2 乗 和	2.69		

* $p < .05$

行ったが、そのままでは安定した尺度が構成できなかった。そこで、これら18項目を取捨選択しながら検討を繰り返して、解釈のし易さを考慮に入れ、“他人の権利のことなど考えずに、自分のことだけ考えていけばよい”や、“他人の役に立とうと考えることは偽善的だと思う”などの9項目からなる利己的社会認識尺度を新たに構成した(Table 2 - 4)。これら9項目について合計し、項目数で割ったものを尺度得点とした。なお α 係数は、.69であった。

迷惑行為に対する許容度は、12状況の迷惑に対する許

容度の平均値を用いた。対処法については、12状況の中で、それぞれの対処法を選択した数をその対処法の得点とした。

尺度間の相関

母親を対象とした社会考慮、各社会認識と許容度の尺度間相関と平均をTable 2 - 5に、学生を対象としたものをTable 2 - 6に示した。まず、それぞれの尺度得点について、世代間の比較をした。社会考慮には、母親と学生の間に有意差はなかった($t(222)=1.28, ns$)。規制的社会認識は、母親の方が学生よりも高かった

社会的迷惑に関する研究（1）

Table 2 - 4 利己的社会認識尺度の主成分分析の負荷量と項目ごとの世代別の平均

項 目	I	母 親	学 生
s7. 他人の権利のことなど考えずに、自分のことだけ考えていけばよい。	.71	1.78(0.70)	1.79(0.68)
s6. 他人の役に立とうと考えることは偽善的だと思う。	.68	2.13(0.76)	2.22(0.95)
s9. 社会全体のことより、自分のしあわせを第一に考えるのが大切だ。	.62	2.66(0.87)	3.06(0.83) ***
s5. 世のため、人のために頑張ることは、自分が損をすることだ。	.52	1.96(0.77)	2.05(0.84)
k9. 自分の利益を中心に行動することは、非難されることではない。	.49	2.75(0.84)	3.14(0.90) **
s8. 「みんなのために」と言っている人も、結局は自分のことしか考えていない。	.48	3.27(0.84)	3.07(1.02) †
s2. 他人のことより、まず自分の身を守ることが大切だ。	.45	3.28(0.91)	3.39(0.83)
k3. 多くの人にとって、地位や財産を得ることは人生最大の目標である。	.45	3.37(0.93)	2.46(1.01) ***
k7. 福祉を強調しすぎると、人間が持つ自由な活力を失わせてしまう。	.44	2.92(0.84)	2.74(0.98)
2 乗 和	2.69		
s: 小市民的社会認識 k: 権利的社会認識			† $p < .10$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 2 - 5 社会考慮尺度、社会認識の各尺度、許容度の相関と平均（母親）

	社 会 考 慮	規制的社会認識	共生的社会認識	利己的社会認識	迷 惑 許 容 度
規制的社会認識	.14				
共生的社会認識	.52 ***	.39 ***			
利己的社会認識	-.21 *	.20 †	-.38 ***		
迷 惑 許 容 度	-.04	-.20 †	-.23 *	.00	
Mean (SD)	3.49(.61)	3.31(.52)	1.08(.46)	2.59(.49)	2.14(.37)
N=87~90					† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 2 - 6 社会考慮尺度、社会認識の各尺度、許容度の相関と平均（学生）

	社 会 考 慮	規制的社会認識	共生的社会認識	利己的社会認識	迷 惑 許 容 度
規制的社会認識	.17 *				
共生的社会認識	.19 *	.23 **			
利己的社会認識	.13	.04	-.26 **		
迷 惑 許 容 度	-.19 *	-.06	-.06	.06	
Mean (SD)	3.38(.61)	2.84(.58)	4.00(.49)	2.66(.45)	2.28(.31)
N=133~135					† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

($t(221)=6.15, p<.001$)。共生的社会認識と利己的社会認識は、母親と学生で差がなかった（順に、 $t(224)=1.29, ns$; $t(222)=.99, ns$ ）。迷惑許容度は学生の方が母親より高かった（ $t(225)=3.10, p<.01$ ）。

各尺度間の相関は、母親と学生で類似したパターンを示した。社会考慮と共生的社会認識との間に正の相関が

確認された（母親; $r=.52, p<.001$, 学生; $r=.19, p<.05$ ）。規制的社会認識と共生的社会認識との間には正の相関が（母親; $r=.39, p<.001$, 学生; $r=.23, p<.01$ ），共生的社会認識と利己的社会認識との間には負の相関（母親; $r=-.38, p<.001$, 学生; $r=-.26, p<.01$ ）が確認された。

次に母親と学生間で対応のあるデータの検討を行った。各尺度の親子間の相関を Table 2-7 に示した。規制的社会認識において母親と学生の間に正の相関が確認された ($r=.35, p<.001$)。尺度得点の比較をした結果、社会考慮は母親が高く (母親 $M=3.49, SD=.62$; 学生 $M=3.25, SD=.60$; $t(87)=2.71, p<.01$)、規制的社会認識も母親が高く (母親 $M=3.31, SD=.53$; 学生 $M=2.89, SD=.55$; $t(85)=6.29, p<.001$)、許容度は学生の方が高かった (母親 $M=2.14, SD=.37$; 学生 $M=2.28, SD=.32$; $t(89)=3.12, p<.01$)。共生的社会認識 (母親 $M=4.09, SD=.47$; 学生 $M=4.09, SD=.47$) と利己的社会認識 (母親 $M=2.59, SD=.50$; 学生 $M=2.60, SD=.44$) には有意な差はなかった。

迷惑許容度と対処方略の検討

Table 2-8 にそれぞれの迷惑行為に対する許容度とその対処方略について、母親と学生別にまとめた。“3. 友達が、スピーチで冗談交じりに新郎 (新婦) の過去の異性経験を口にする事” ($t(227)=5.85, p<.001$)、 “4. 披露宴でカラオケ好きな人が、拍手をもらって歌い続ける事” ($t(227)=2.06, p<.05$) など、結婚式における迷惑6項目のうち4項目において学生の許容度が母親よりも高いことが明らかになった。逆に、葬儀における迷惑行為では、“7. 近所の人、遺族が望んでいるわけでもないのに、お通夜の席に長居すること” ($t(226)=2.22, p<.05$) においてのみ、学生の許容度が母親に比べて高かったが、その他の項目では許容度に差

Table 2-7 社会考慮・社会認識・許容度の母親と学生間の相関

社 会 考 慮	規制的社会認識	共生的社会認識	利己的社会認識	許 容 度
.07	.35***	.03	.18	.16

*** $p<.001$

Table 2-8 迷惑行為の許容度と対処方略の世代間の比較

	迷惑許容度 ¹	対 処 方 略 ¹				合 計	χ^2
	Mean(SD)	規 制	共 生	放 任	無 関 心		
1 友だちの結婚式に、寝坊して遅刻すること	1.81(.90) 1.87(.76)	2 4	56 63	32 62	3 7	93 136	4.33
2 よちよち歩きの子どもがじっとしていられなくて、披露宴会場を歩き回り、会場係の人たちのじゃまになること	2.28(.80) 2.32(.87)	8 18	80 109	5 9	0 0	93 136	1.41
3 友達が、スピーチで冗談交じりに新郎 (新婦) の過去経験を口にする事	1.49(.62)*** 2.13(.92)	20▲ 6▽	65 104	8 22	0 4	93 136	19.69
4 披露宴でカラオケ好きな人が、拍手をもらって舞い上がり、歌い続けようとする事	2.03(.76)* 2.25(.81)	5 11	82 104	5 13	1 8	93 136	5.99
5 親族の人が飲み過ぎ、酔っぱらって羽目をはずすこと	2.05(.76) [†] 2.26(.88)	16 16	66▲ 78▽	10▽ 36▲	1 6	93 136	11.60
6 友だちが余興の一環として、新婦から新郎へのキスを要求すること	3.19(.65)** 3.46(.53)	4 1	83▲ 106▽	3▽ 21▲	2 8	92 136	13.72
7 近所の人、遺族が望んでいるわけでもないのに、お通夜の席に長居すること	1.88(.81)* 2.13(.82)	8▽ 28▲	80▲ 74▽	5▽ 30▲	0 2	93 134	24.60
8 親族側の席に、派手な化粧をして、金色のアクセサリをつけた参列者がいること	1.47(.64) 1.39(.59)	0 10	84 113	8 11	1 2	93 136	7.26
9 遺族とたいして親しくもない人が、通夜の席で死因についてあれこれ尋ねること	1.73(.63) 1.72(.72)	16▽ 46▲	72▲ 86▽	3 3	2 0	93 135	10.37
10 参列者の中にお焼香する人がいなくなっても、出棺の時間が来るまで待たせること	3.01(.84) 3.12(.68)	34 62	49 51	10 22	0 0	93 135	5.14
11 葬儀のための花輪や生花が通行のじゃまになること	2.62(.86) 2.59(.81)	9 14	75 100	8 20	1 2	93 136	2.14
12 葬儀会場で久しぶりに会って、二人だけで話がはずむこと	2.09(.78) 2.11(.74)	7 20	82 109	4 5	0 2	93 136	4.26

¹上段は母親、下段は学生。 ▲は残差分析の結果5%水準で多いことを、▽は少ないことを示している。

[†] $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

Table 2－9 対処得点の世代間の比較

	規制的対処	共生的対処	放任的対処	無 関 心
母 親	1.39(1.26)*	9.40(2.00)***	1.09(1.42)***	0.12(0.39)*
学 生	1.73(1.16)	8.07(1.88)	1.87(1.54)	0.30(0.70)

* $p<.05$ *** $p<.001$

Table 2－10 社会考慮、社会認識と対処方略の相関（母親）

	規制的対処	共生的対処	放任的対処	無 関 心
社 会 考 慮	-.10	.05	-.01	.12
規制的社会認識	-.11	.13	-.09	.02
共生的社会認識	.11	.09	-.22*	.01
利己的社会認識	-.07	-.08	.13	.18

* $p<.05$

Table 2－11 社会考慮、社会認識と対処方略の相関（学生）

	規制的対処	共生的対処	放任的対処	無 関 心
社 会 考 慮	.13	.16	-.20*	-.19*
規制的社会認識	.02	.00	.02	-.07
共生的社会認識	-.08	.17*	-.07	-.17*
利己的社会認識	.00	-.11	.09	.08

* $p<.05$

はなかった。対処方略については、全体として共生的対処方略が多く選択されていた。中でも、母親が共生的対処を多く選択し、学生が放任的対処を多く選択することが確認された。

対処方略の得点についてTable 2－9に示した。共生的対処 ($t(227)=3.89$, $p<.001$) は母親に多く、規制的対処 ($t(227)=2.16$, $p<.05$)、放任的対処 ($t(227)=5.14$, $p<.001$)、無関心 ($t(227)=2.29$, $p<.05$) は学生に多いことが確認された。

社会考慮や社会認識と対処方略との関連を検討した母親の相関をTable 2－10と学生の相関をTable 2－11に示した。社会考慮や社会認識と対処方略にはあまり関連がなかった。

考 察

結婚式の迷惑行為に対しては、学生が母親より許容度が高い傾向があったが、葬式の迷惑行為の許容度には差がなかった。そこで、結婚式の迷惑行為の許容度と社会考慮、社会認識の関連について世代ごとに相関を求めた (Table 2－12)。母親では規制的あるいは共生的社会認識が高いものは迷惑を許容しない傾向があった ($r=-.22$, $p<.05$; $r=-.35$, $p<.01$)。一方、学生では社会考慮の高いものが迷惑を許容しない傾向があった ($r=-.23$, $p<.05$)。このような傾向は、結婚式と葬式を合わせた迷惑行為の許容度の結果でも示された (Table 2－5, Table 2－6)。斎藤 (1999) は、社会考慮や社会認識と迷惑認知との関連を指摘している。本研究の結果から、迷惑行為の種類や世代の違いによって社会考慮や社会認識と迷惑許容度の関連の仕方が異なる可能性が

Table 2－12 結婚式の迷惑許容度と社会考慮、各社会認識との世代別の相関

	社 会 考 慮	規制的社会認識	共生的社会認識	利己的社会認識
迷惑許容度(母親)	-.11	-.22*	-.35**	.03
迷惑許容度(学生)	-.23**	-.06	-.05	.02

* $p<.05$ ** $p<.01$

示唆された。

社会考慮や社会認識の概念についてはさらに検討することが必要である。これらの尺度間相関は、母親と学生において全体的にはほぼ類似したパターンを示していた。社会考慮は規制的社会認識や共生的社会認識とは正の相関を、利己的社会認識とは負の相関を持つことが構成概念から予測できる。この結果は母親においてより顕著に確認された。また、世代間比較では、対応のないデータでは規制的社会認識のみ母親が高かったが、対応のあるデータでは社会考慮と規制的社会認識が母親の方が高く一貫した結果が得られなかった。

社会考慮について項目ごとにの比較をした場合には、母親の方が高い項目 (e.g., 3, 10) と、学生の方が高い項目 (e.g., 12, 13) とが混在していた (Table 2-1)。本研究では社会考慮を一因子として解釈したが、社会の動向に対する考慮と社会における自己の考慮の二つの概念が含まれているとも解釈できる。

社会認識の中では、住みよい社会にするためには規則や厳しい法律が必要だとする規制的社会認識と、他者に配慮することによって社会が改善するとする共生的社会認識との間に、正の相関が得られた。この傾向は、母親においてより顕著であった。この結果は、これら二つの社会認識が相対するものではなく、両立することによってよりよい社会が成立するのだという認識を示唆するものである。また規制的社会認識は母親と学生の間に正の相関が確認され、親子間で規制的な社会認識が共通していることが示された。これらの結果を踏まえ、社会考慮や社会認識の関連についてさらに検討をすることが必要である。

次に、社会認識と迷惑行為の対処方略について検討する。社会認識を世代間比較すると、規制的社会認識のみが母親の方が高かった ($t(221)=6.15, p<.001$)。しかし対処方略は、母親は、共生的対処を選択する割合が高く、学生の方が規制的対処を選択する割合が高かった。また利己的社会認識に世代間差はなかったが、放任的対処や無関心の選択は学生の方が高かった。本研究では、社会認識と迷惑行為の対処方略は関連すると予測されたが、関連は確認できなかった。また、社会認識と対処方略得点の間にも、顕著な関連は得られなかった。被験者の共生的対処方略の選択率は全体の70%を越えていた。このような選択の偏りが、社会認識と対処方略とに関連が得られなかった原因である可能性を指摘できる。本研究に比べて、斎藤 (1999) では、社会認識と対処方略の関連がより明確に確認されていることから、一般的な迷惑行為と特定の迷惑行為とでは、異なった認知がされていることを示唆している。特に本研究で扱った結婚式や

葬式といった人生における特殊な儀式的状況の迷惑行為は、日常生活に見られる迷惑行為とは異なる可能性があるといえる。

社会考慮と対処方略は、学生においてのみ関連があり、社会考慮の低いものが、放任的対処を取ったり無関心であることが示された (順に, $r=-.20, p<.05$; $r=-.19, p<.05$)。斎藤 (1999) でも、社会考慮の高い人は迷惑行為を放任しないという結果が得られており、本研究の結果もこれを支持するものであった。

本研究によって、社会考慮や社会認識と迷惑行為との関連が明らかになった。しかし、本研究のデータは女性の学生に被験者が偏っていたことや、母親のみのデータによって世代間の比較を行ったことなど問題点も含んでいる。今後の課題として、社会考慮や社会認識の概念的な洗練、特定状況と一般的状況の迷惑行為の関連、世代や性別による迷惑認知の差異の検討などをする必要がある。

引用文献

- 相川 充 1997 対人関係能力向上への手だて 誌上シンポジウム「対人関係能力の低下と現代社会」名古屋大学教育学部紀要 (心理学), 44, 17-24.
- 大坊郁夫 1994 公共場面における非社会的行動の研究: 女子学生の認知傾向 日本心理学会第58回大会発表論文集, 84.
- Dalbert, C., & Katona-Sallay, H. 1996 The "belief in a just world" construct in Hungary. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 27, 293-314.
- 藤沢 苐・浜田哲郎 1961 Fスケールによる人格の研究 I 教育・社会心理学研究, 2, 35-46.
- 磯崎三喜年 1987 共感性 小川一夫監修 社会心理学用語辞典 北大路書房 Pp.58-59.
- 岩淵千明・小牧一宏 1997 授業規範: 反規範行為への規制意識 日本社会心理学会第38回大会発表論文集, 342-343.
- 岩淵千明・小牧一宏 1998 授業規範: 教師の規制意識 日本グループ・ダイナミクス学会第46回大会発表論文集, 234-235.
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 1982 Locus of Control 尺度の作成と信頼性, 妥当性の検討 教育心理学研究, 30, 302-307.
- Kohlberg, L. 1969 Stage and sequence: The cognitive-developmental approach to sociali-

社会的迷惑に関する研究（1）

- zation. In D. A. Goslin (ed.), *Handbook of socialization theory and research*. Rand McNally. (永野重史訳 1987 道德性の形成：認知発達のアプローチ 新曜社)
- 大淵憲一 1993 人を傷つける心 サイエンス社
- 斎藤和志 社会的迷惑行為と社会を考慮すること 1999 愛知淑徳大学論集（文学部編），24, 67-77.
- 高田利武・矢守克也 1998 高校生の乗車行動と文化的自己観 青年心理学研究，10, 19-34.
- 辻岡美延・村山 繁 1975 価値観の六次元 関西大学社会学部紀要，7, 161-174.
- 和田 実・久世敏雄 1990 現代青年の規範意識と私生活主義—パーソナリティ特性との関連について— 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），37, 23-30.
- 山岸俊男 1990 社会的ジレンマのしくみ サイエンス社
- 山口 勸・岡 隆・丸岡吉人・渡辺聡・渡辺久哲 1988 合意性の推測に関する研究（I）—集団主義的傾向との関連について— 日本社会心理学会第29回大会発表論文集，176-177.
- 吉田俊和 1998 社会的迷惑行為を考える—多様なアプローチを探る— 日本グループ・ダイナミックス学会第46回大会発表論文集，11.

（1999年9月16日 受稿）

ABSTRACT

A Study of Social Annoyance (1)

Toshikazu YOSHIDA, Naoki ANDO, Tadahiro MOTOYOSHI, Tatsuo FUJITA,
Shuichi HIROOKA, Kazushi SAITO, Kumiko MORI, Yasuhiko ISIDA, and Mitutaka KITAORI

Social annoyance was defined as any behavior which may bother, annoy, or irritate others, usually occurring between strangers. Social annoyance is aimed solely toward fulfilling one's own personal needs, at the sacrifice of inconveniencing others. This series of studies investigated social annoyance from a cognitive perspective. Study I examined the concept through three surveys. In Surveys 1 and 2, undergraduates ($N=672$) responded to questionnaires which included items which dealt with their attitudes toward social annoyance. These questionnaires consisted of attitude ratings of 120 annoying behaviors, along with various personality scales (e.g., Locus of Control (Kanbara et al, 1982), Social Consciousness (Wada & Kuze, 1990)). Factor analysis of the 120 behaviors revealed two factors, labeled "deviation from rules and manners", and "inconveniencing others." These attitudes showed positive correlations with the personality variables of "respect for norms", "philanthropic values" and "moral values". Survey 3 involved undergraduates ($N=417$) who responded to a questionnaire which included items asking for their perception of how they think others might feel toward the 120 annoying behaviors. Results indicated that subjects perceive the annoyance that others experience exceeds what they themselves experience. In Study II, social annoyance within two specific social events, i.e. weddings and funerals, were examined. Subjects were undergraduates and graduate students ($N=136$, mean age=21.0), along with their mothers ($N=91$, mean age =49.2). The questionnaire included items which dealt with: (1) attitudes toward 120 annoying behaviors, and means of coping; (2) the degree to which they perceive themselves as a social entity versus an individual entity (Social Consideration); and (3) their perception of how society should be (Belief about Society). Factor analyses showed that Belief about Society consists of three sub-scales: regulative, symbiotic and selfish belief. Furthermore, mothers scoring high on regulative and/or symbiotic perceived annoyance the most, while students showed a positive correlation between Social Consideration and attitude toward social annoyance. These results suggest that belief about society and social consideration are important concepts toward examining social annoyance.

Key words : social annoyance, social consideration, belief about society,

付 録

研究 I で用いられた尺度のうち、翻訳したもの、もとの尺度に変更を加えたものを以下に示す。なお、各項目の番号は、本調査時につけられていたものである。

公正世界信念尺度

1. 正義は常に悪に勝つと思う。
2. 世の中は基本的には公正なものだと思う。
3. ずるいことをした人は、長い目で見れば償いをさせられるだろうと思う。
4. 人生のあらゆる場面（仕事、家庭、政治など）における不公正な行いは、例外的なものだと思う。
5. だいたいのところ、人は自分に見合ったものを得ていると思う。
6. 大切なことを決めるときには、人は公正さを大事にすると思う。

権威主義尺度

1. 科学が進歩しても、どうしても人間の精神では理解されない多くの重要なことが残るであろう。*
2. 親や先生の言うことをよくきき、尊敬するということは子どもの学ぶべき最も重要なことである。
3. 人は何か超自然的な力に決定されて生きているに違いない。*
4. よい礼儀作法・習慣・しつけの身につけている人と、そうでない人とは、大きな違いがあるので、つきあってもうまく行くものではない。
5. 若い人に最も必要なものは、厳格な訓練と強い決断力と、家族や国のために大いに働こうという意志である。
6. 人の名誉を傷つけたものは必ず罰せられなければならない。
7. 若い人達は、ときどき反抗的な考えをすることがあるが、成人するにつれて、そういう考え方に打ちかって、おちつくようになるべきである。
8. 法律や政策以上に、わが国で最も必要なものは、国民が信頼のおくことのできる、勇気のある、疲れを知らない献身的な指導者である。
9. 子どもを襲うような性的犯罪者は刑務所に送り込むだけでなく、もっとひどい目にあわせるべきだ。
10. 両親に対して深い愛情や感謝や尊敬を感じない人は、人間として最低である。
11. 不道德なことを平気でやる者や、何でもひねくれて解釈する者を社会から排除することができれば、たいていの社会的な問題は解決されてしまうものだ。
12. ムダ口をきかずにもっと働けば、暮らし向きはよくなるはずだ。
13. 同性愛は社会的に許されるものではない。
14. よいしつけの人が友人や親類の者を傷つけるなどということは、精神の異常者としか考えられない。
15. 苦しまずに、真に重要なことを学んだものは一人もいない。*

* は分析において除外された項目

価値観尺度

<自己利益優先的人生観>

5. 他人を犠牲にしても自分の思う通りに生きてみたい。H
1. 隣人を押しのけても出世することだけを考えて生活したい。H
7. 目的の実現のためには手段を選ばず進みたい。H
11. 所詮この世は金次第であるから経済力を身につけて生きたい。H
8. 自分の欲望を実現するためには道徳などにこだわらずに生きたい。D
3. 人が悲しもうと自分の目的を達成するよう努力したい。H
19. 他人のことには全く関わらず自分のことだけを考えて生きたい。H
4. 道徳などあってなきが如く、自分の生き方を貫きたい。D
13. 人の幸福は金の力で決まるから金儲けに徹して人生を送りたい。H

9. 高い地位や名声を得る人間になりたい。H

＜博愛的人生観＞

15. 人を支配するよりは人を愛する人間になりたい。H

23. 今よりも、もっと人には思いやりのある人間になりたい。H

16. 礼儀を重んじて生きて行きたい。D

21. 人々の幸福に少しでも貢献できるよう努めたい。H

17. 人を利用することは慎んで生きたい。H

＜道徳的人生観＞

6. 自分は社会の秩序に従って生きて行きたい。D

2. 世の中の秩序に従って生きたい。D

12. 慎みと理性によって培われた秩序に従って生活したい。D

18. 私情を捨て自制しながら生きて行きたい。D

＜除外された項目＞

22. 何事にも自己規制が必要である。D

20. 自律自足の人間として理性に従って生きることを目標としたい。D

24. 俗世間の欲望を節制して生活したい。D

14. 社会の変化は、急激にではなく慎重に行なってほしい。D

10. 法律に縛られないで自由に生きて行きたい。D

H, Dはオリジナルにおける尺度構成を表す（H：博愛的人生観，D：道徳的人生観）。